

解題

アルブレヒト・レーマン「雰囲気語る」

金城 ハウプトマン 朱美

KANESHIRO-Hauptmann Akemi

本稿はアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann) の著書『経験について語ること - 〈語り〉の文化科学的意識分析研究』(Reden über Erfahrungen – Kulturwissenschaftliche Bewusstseinsanalyse. Berlin: Reimer 2007)の第2章「雰囲気語る」(Atmosphären erzählen, 67-98頁)の全訳である。

著者のアルブレヒト・レーマン (1939-) はゲオルグ・アウグスト・ゲッティンゲン大学で社会学、教育学、歴史学を専攻し学位取得後、1983年から2005年までハンブルク大学民俗学研究所で教授として教鞭を執った。レーマンは労働者や東欧からの引揚者などさまざまなミュリューから経験談やライフヒストリーを聞き取り、それらを『語りの構造と履歴書』("Erzählstruktur und Lebenslauf", Frankfurt 1983), 『捕虜と帰還』("Gefangenschaft und Heimkehr", München 1986)などにまとめている。ドイツ人と森との関係を語り研究の視点から森の記憶や伝説等をもとに探求した著書("Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald", Reinbek 1999)が『森のフォークロードイツ人の自然観と森林文化』(法政大学出版局 2005年)のタイトルで識名章喜と大淵知直により和訳されている。

レーマンのこれまでの研究は海を越えて日本の研究者の目にも留まり、2010年9月に日本民俗学会から招聘され、国際シンポジウム「オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて - 文化人類学・社会学・歴史学との対話」が開催された。学会シンポジウム後に関西学院大学で開かれた公開シンポジウム「〈語り〉研究の最前線 - 日常・経験・意識をめぐる方法」では、講演「雰囲気と気分 - 意識分析のコンテクストにおける記憶とナラティブに及ぼす影響」を行い、レーマンの研究概論が日本の研究者にも広く知られることになった。国際シンポジウムの講演は、同タイトルで岩本通弥他の編集により成城大学民俗学研究所グローバル研究センターから出版されている。

本書はレーマンが現役時代から取り組んできたライフヒストリー研究と意識研究の集大成ともいえるべき著書である。4章から構成されており、語り研究の新しい可能性を示したとドイツで評価されている。第2章「雰囲気語る」は本書で中心的な位置を占め、まずドイツ民俗学や哲学、美学における雰囲気に関する研究成果を端的に紹介し、続く第3章と第4章で内容を発展、展開させている。レーマンの研究にたいする理解をさらに深めることを目的に、今回は第2章を和訳した。

著名人からではなく、ごく一般の人びとが語るさまざまな経験談や体験談を研究対象とし、その語りに織り込まれている意識や雰囲気に注目して、語りの特性をとらえようとした点が新しく、これがレーマンの研究の特徴である。第1章「文化科学的語り研究において経験を鍵概念として捉える」では、文字通り「経験」を文化科学的語り研究の鍵概念として捉え、「経験」を語る意義やそ

の語りと従来の口承文藝研究で分類されてきたジャンルとの関係や、経験を語るさいの意識との関わりについて論じている。第3章「研究領域」では第1章と第2章を踏まえて、雰囲気を読み取る「語り」の実例を紹介し、また伝説の成立についても詳しく論じている。そして雰囲気を意識して読み取る風景の代表として、故郷の風景を取り上げ、故郷は、比較というドイツ民俗学では欠かせない研究法なしには考察できないと強調している。比較により、雰囲気を読み取り方に文化的差異があることが明らかになり、この見解を異文化コミュニケーションの研究テーマへと発展させている。第4章「現代文化科学的研究における語りの研究」では、人びとの語りを研究することで、ヨーロッパの文化や社会を読み取り、ヨーロッパの実像を浮き彫りにできるだろうと述べている。

肝心の第2章では、雰囲気に焦点を当てている。普段意識していない、周囲に漂っている無形のものと言語化する難しさを認識しつつ、語られた話から社会的コンテキストやさまざまな状況を顧慮して雰囲気を読み取ることや、その雰囲気を知覚することに関する深い考察を行っている。雰囲気は人が語ろうとして意図的に語られるものではなく、自然に無意識のうちに話に織り込まれて語られているものだとレーマンは理解している。

これまでに「雰囲気」を研究テーマにした研究者として、哲学の分野ではヘルマン・シュミッツ (Hermann Schmitz) とゲルノート・ベーム (Gernot Böhme) の名前が、民俗学ではハンガリー出身でインディアナ大学教授だった口承文藝研究者のリンダ・デグの名前が挙げられ、それぞれの研究内容が簡潔に紹介されている。デグは1962年にベルリンで出版した彼女の教授資格論文『メルヘンと語り手と語りの共同体』 (*Märchen, Erzähler und Erzählgemeinschaft*. Berlin) で、語り手から醸し出されている雰囲気や語り手、語りのコンテキストについて考察しており、この2人の哲学者よりも前に、このテーマに取り組んでいた点をレーマンは高く評価している。しかし、語り手の素性やコンテキストに注目した研究を最初に行ったのはデグではない。例えば20世紀の初めに東プロイセンの村バイスライデンでメルヘンや民謡を集めて調査したヘアタ・グルッデ (Hertha Grudde) や、グルッデが観察した「語りの共同体」の存在自体に疑問を抱き、再調査に出かけたゴットフリート・ハンセン (Gottfried Hanßen) がいたことを、訳者はここで補足しておきたい。

伝説が生まれる雰囲気について、作家のルートヴィヒ・ライストナー (Ludwig Laistner) は霧が発生している雰囲気から伝説が生まれるとし、話の誕生にはまず雰囲気があることを前提にした。これに続いて、ヴィル＝エーリヒ・ポイカート (Will-Erich Peuckert) は一歩踏み込んで、周りの環境 (雰囲気) を読み取るマスターが文化の中にあることを見出し、風景が主体へ作用して、民衆の語りが成立するとした。こうしてグリム童話に登場する「暗い森 (dunkle Wald)」が主体に作用し、メルヘンが生まれたとも考えられる。映画「プレア・ウィッチ・プロジェクト」(1999年) が欧米で大ヒットした要因のひとつに、暗い森を舞台として起こった伝説風の事件を素材にしていたことが挙げられ、ポйкаートの解釈が現代においても当てはまっていると解釈できるので、レーマンは、本論でこの映画を引き合いに出したのであろう。

ドイツの *Erzählforschung* の出発点は、グリム兄弟が民間伝承を蒐集し、『子どもと家庭のメルヘン集』 (*Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen*) (以下、グリム童話) を編集出版したことに遡る。グリム兄弟に倣い、過去の遺物 (遺産) が消失する前に書き留めて書承化し、将来に継承しようと民話収集が各地で始まった。そしてメルヘンの類話の比較研究が行われ、アールネ・トンプソンの『モチーフインデックス』 (Antti Aarne/Stith Thompson: *Types of the Folktale. A classification and bibliography*) を参照して、特定のメルヘンの型から、その伝播や出所を調べる歴史地理的研究

方法が20世紀の中頃まで好んで用いられた。そのため、Erzählforschungは長年、古くから伝わる口承や書承による話の研究と理解され、「口承文藝研究」とか「説話研究」と和訳されてきた。しかし、1960年代あたりから話が語られたコンテキストや、語り手に焦点が当てられ、レーマンが文中で示唆していたように、欧米では歴史地理的研究は廃れていき、人びとに語り継がれてきた古い話ではなく、人びとが今まさに日常生活で語るアクチュアルな話が注目されるようになった。というのもメルヘンや伝説が書承化し、またカセットテープやレコードやCDといったメディア媒体から聴く話になり、これらとは異なる他の話が直接語られるようになったからである。昔であれば伝説と呼ばれるような奇怪な体験談は、現代では第三者に語られることにより現代伝説になったり、噂話になったりする。現代伝説にしても噂話にしても、その時の場の雰囲気次第で、その話が語られたり語られなかったりする。そして誰がいつどこで語ったのかも研究対象になる。デグはメルヘンを「美しい嘘」と呼び、聴き手が信じたがる嘘であると呼んでいるが、現代で好んで語られる経験談は、それとは逆で真実であることが前提になっている。人びとが聴きたがる話の特徴が今と昔では正反対である。しかし、今も昔も変わらないのは、語り手が醸し出す雰囲気であり、つまり聞き手が語り手を信頼できる雰囲気である。語り手と聞き手の信頼関係がなければ、メルヘンであれ現代伝説であれ、インタヴューして聞き取った経験談であれ、その場を濁すだけのお話に過ぎない。Erzählforschungでは、そのような記憶に残らないお話を研究対象にはしていない。

ここでErzählforschungというタームについて再考する。Erzählforschungとは、人びとがさまざまなメディアを通じて語るあらゆる内容の話が、どのような社会的コンテキストで語られたのか、どのような意味があるのかを探り出すことを目標とする研究だと定義できるだろう。そのため、この言葉にぴったりと当てはまる和訳を見つけるのは困難であり、あえて訳せば「語り研究」が妥当ではないだろうか。

レーマンは、2017年5月に開催されたルート・モアマン (Ruth Mohrmann) 女史の追悼ロキウムでアンドレ・ヨレス (André Jolles) の代表的な著書『Einfache Formen (単純な形式)』にかけて、「平明な言葉づかい—民俗学の課題」(Einfache Sprache. Eine Herausforderung für die Volkskunde) というタイトルで講演を行った。ドイツ連邦議会が発行する難民や移民、外国人といった大人向きに「平明な言葉づかいで」、いわゆる分かりやすいドイツ語でリライトされた情報誌を研究素材として取り上げ、何を「分かりやすく」伝えようとしているのか考察していた。分かりやすいと言ってもあくまでもドイツ人の視点から、つまりドイツ語母語者が判断した分かりやすさであり、もともとは識字弱者を対象にしていた言葉 (einfache Sprache) が「平明な言葉づかい」であり、現在は対象者が変わってしまっている。そのため偏見を抜きにして理解できない文章であると訳者は考えているが、このテキストの本格的な学術的研究をレーマンは期待していた。新しいテキストの種類に着目する先見の目があるという点から、ドイツ民俗学や他の研究分野にどのような影響を与えていくのか、レーマンの研究を今後も見逃せない。